

## あとがき

本書で取り上げた三つの絵巻のうち、「粉河寺縁起絵巻」について研究を始めたのは十年以上も前になる。二〇〇三年に奈良国立博物館で行われた「女性と仏教」という展覧会でこの絵巻の最終部分が長く展示されており、絵をたどって見ていくうちに、河内から粉河へはるばるとやってきた女性がいきなり剃髪され一族が出家するという結末に、何か腑に落ちないものを感じたのである。主人公であるはずの女性が一目でそれとわかるような華やかさをもって描かれていないことにも疑問を持った。

疑問を持つてから長い時間を費やすことになってしまったが、自分なりに絵巻全体を解釈し、こうして文章として書き終えることができ、肩の荷が下りた気がする。「粉河寺縁起絵巻」論をきちんと書いておかねばならぬという気持ちはずっと抱いてきたからだ。それは、恩師千野香織先生に教えていただいたジェンダー、フェミニズムの視点を使って古代・中世の絵を読み解くという実践を、この絵巻解釈によって展開し、恩返しをしたいと思っていたからである。また千野先生が行為体という言葉を使って教えてくださったことを、この絵巻研究で行いたかったからでもある。前著『表象としての美術、言説としての美術史』（ブリュッケ、二〇〇三年）のあとがきで私は以下のことを書いた。

千野先生は、たとえ千年前に作られた作品でも、それを今の研究者が扱う以上、それは今の私たちにとつての切実な問題なのだ、よく言われていた。美術作品という「モノは、現在を生きている私たちの目の前にある。それについて何かを語る私たちの言葉も、現在の世界に向かって発信されている。美術史とは、まさに現在の学問なのである」(千野「フェミニズムと日本美術史」『大航海』三九、二〇〇一年)。(中略)

そして先生は、次のように考えを発展させていく。「過去に生み出された作品は、そのほとんど全部が、どこかで、階級・身分や、ジェンダーや、人種・民族に関する、深刻な問題をもっています。それは、やむを得ないことです。しかし、作品をパフォーミング・マティヴに読み、現在や未来の社会に働きかけていくことができるなら、私たちは、もはや、過去の囚人ではありません。過去に生み出された作品を扱う場合でも、希望をもつて、新しい読みの可能性を開き、現在や未来のために、貢献することができるのではないのでしょうか。読みを閉じてしまわないこと、現在の文脈とともに作品を解釈し続けること、それが重要なのだと、私は考えています」(二〇〇一年九月にニューヨーク大学大学院で予定されていた千野先生の講演の原稿より)。

千野先生は、自分が行為体となって作品を見れば作品は新しい解釈に開かれていくとされ、そのようにすることが現在の学問として美術史研究をすることであるとされた。私が絵を新しく解釈するという行為を実践することができたのは、それによつてこそ今の自分も新しく開かれていくのだとする千野先生の導きがあったからである。亡くなられて十三年が経つ今も、その学恩は計り知れないと毎日のように思っている。

「粉河寺縁起絵巻」論を最初に発表したのは、二〇〇四年五月に慶応大学で行われた美術史学会全国大会のときである。発表を終えると、若桑みどり先生が声をかけてくださった。若桑先生は、私が美術史の世界に入りきつかけを与えてくださった方だ。私が東京外国語大学の四年生のときに非常勤講師として講義に来てくださり、レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晚餐」やジョルジョーネの「テンペスタ」についての解釈を披露してくださったのだ。その授業には魅了され、これほどおもしろい学問があるのかと目から鱗が落ち、その後美術史研究を志すことになる。大教室で仰ぎ見たその若桑先生に学会の会場で励ましていただき、大変うれしかったことを昨日のことに覚えている。

その後『ジェンダー史学』に論文を発表したが、原稿用紙五十枚という字数制限の中では思うように論を展開できず、「粉河寺縁起絵巻」論を十分に書いてみたいという思いを強くした。そしてこの絵巻との格闘が続く中で、「寺の縁起」というものがどのような状況で必要とされるのか、ということにも考えが及ぶようになる。また先達による諸研究に対する見解も書いておかねばならないとの思いも重なった。一つの絵巻について多方面から論じることを固めていく作業が続いた。

それと並行し、いくつかの絵巻にも目が向いた。第二章で取り上げた「信貴山縁起絵巻」は、千野先生が研究テーマにされていた絵巻でもある。千野先生は尼公の身になって考えるために、麓から歩いて信貴山に登ったことがあるとおっしゃっていた。老齢の尼公が杖をつきながら、笑顔で歩みを進める姿を見てみると、励まされ元気が湧いてくる。この尼公の不思議な行動の表現に対し、納得できるような解釈を行ってみたいという思いを抱いてきた。

第三章の「掃墨物語絵巻」で登場する娘は可愛らしい。可愛らしいだけでなく、顔の墨を自ら洗い流す姿、そして剃髪される姿は凜としており、女性の主体性が表現されていると思える。絵巻の最後に描かれる母と娘二人の生活の様子にも、心惹かれる。凍てつくような冬景色の中、簡素な造りの庵の中で、母と娘の女性二人が冗談を言いながら楽しそうに隠遁生活を送っているのである。その情景を見ると、自分と母との関係にも思いが及ぶ。この絵巻には、女性が母との関係を思いつつ心を寄せられるような情景が描かれている。そこには何か深

い意味が込められているように思え、研究に取り組んだ。

そのような中で、自分の身にも変化が起きた。二〇〇九年に滋賀県立大学に常勤職として採用されたのだ。それまでの十数年間は非常勤講師をしながら先が見えない暗闇の中で研究を続けていたため、この採用は大きな転機となった。本書をなすに至る研究は、その前後の時期にわたって続けたものである。この数年は学生とともに美術史を勉強する楽しさを知ることができ、視野も広がった。学生が全力を出して卒論を書き上げる姿を前にすると、私も身が引き締まる思いである。五十三歳になった今、この十数年を振り返り、本書を書き上げ上梓することができ、私の人生の大きな区切りになると思っている。

本書におさめた原稿は、すべて書き下ろしである。各章のきつかけとなった論文は以下の三つのものである。これらを元としつつ、すべての内容を書き改めた。

## 第一章

「ジェンダーの視点が拓く「粉河寺縁起絵巻」——高野山に対抗する自己表象としての絵巻」

（『ジェンダー史学』一 ジェンダー史学会編、二〇〇五年、六五〜七九頁）

## 第二章

「信貴山縁起絵巻」の尼公の表象——女人往生のイメージ」

（『王朝文学と仏教・神道・陰陽道 平安文学と隣接語学2』藤本勝義編、竹林舎、二〇〇七年、二九〇〜三一七頁）

## 第三章

「不浄観から読み解く「掃墨物語絵巻」——中世絵巻が見せるフェミニン・エンディング」

（『視覚表象と音楽 ジェンダー史叢書 第4巻』池田忍・小林緑編、明石書店、二〇一〇年、一四二〜一六二頁）

本書の執筆にあたっては、様々な方々のお世話になった。

物語／絵画研究会では、例会のたびに刺激を受け、仲間と研究を進める充実感を味わわせてもらっている。本書の内容に関しても、この研究会で発表の場をいただき数々の有意義な意見を頂戴した。千葉大学の池田忍さんがリーダーとして計画・実施された文部科学省科学研究費基盤研究（B）（二〇〇七〜二〇〇九年度）「『もの』とイメージを紹介した文化伝播に関する研究——日本中世の文学・絵巻から」、同じく基盤研究（B）（二〇一〇〜二〇一二年度）「絵巻に描かれた「場」と「もの」に見る中世日本の重層的世界観に関する研究」では、研究分担者に加えていただいた。この研究会では、多くの絵巻に描かれた様々な図像を比較しその意味を検討する機会や、絵巻を調査する機会をいただいた。池田忍さんは、活気ある研究の場へいつも私を導いてくださる。「粉河寺縁起絵巻」論で取り上げた文献史料の読解にあたっては、滋賀県立大学の同僚、水野章二先生が懇切丁寧に教えてくださった。また東海大学の小沢朝江さんには、描かれた建築物についてご教示いただいた。愛知教育大学の鷹巣純さん、大阪大学の藤岡穰さん、京都府立大学の安達敬子さん、同志社女子大学の赤澤真理さんにも、本書を執筆する上で貴重なご助言をいただいた。

本書掲載の絵巻の調査や写真図版の借用に際しては、粉河寺管長逸木盛修氏、信貴山朝護孫子寺、徳川美術館、奈良国立博物館、京都国立博物館の諸氏・諸機関にお世話になった。また公益財団法人出光文化福祉財団には出版協力をいただいた。

ブリュッケの橋本愛樹さんは、私の二冊目の単著刊行も快く引き受けてくださった。校正のたびに本文にも図版にも相当な直しを入れてしまうにもかかわらず、そのたびにすべて美しく直してくださった。黙々と良い本を

作ろうとされる真摯な姿勢に頭が下がる思いである。

これらお世話になった諸氏、諸機関の皆様、この場を借りて深く感謝の意を表させていただきたいと思えます。そして私の研究を支えてくださるすべての方々——研究仲間の皆さん、大学の同僚、学生、友人、そして家族に、心から御礼を申し上げます。

二〇一五年五月十四日

亀井 若菜